

本草拾遺名函圖  
五

ル 3  
3279  
6



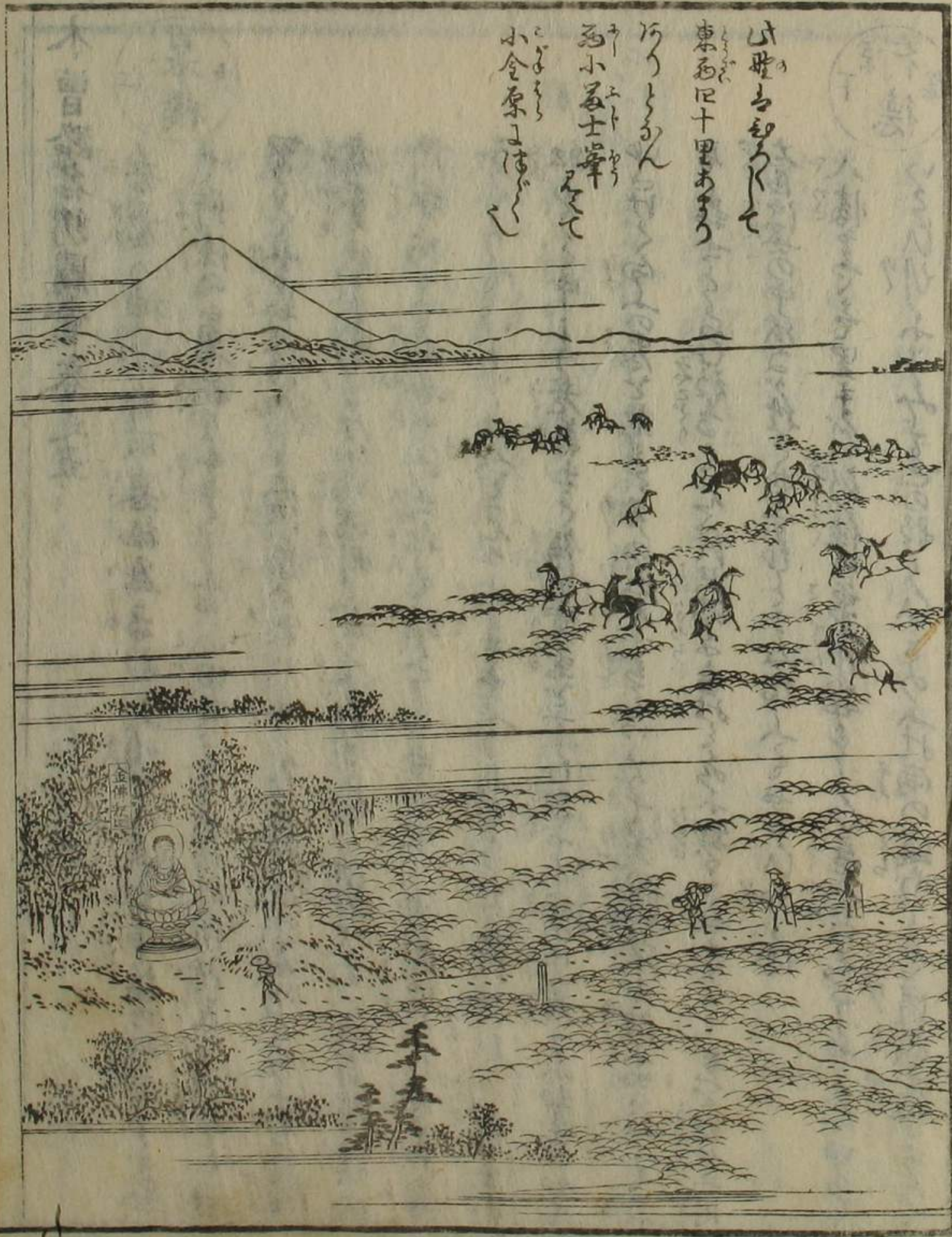
水曾路名所圖會卷之五

○麻嶋古城	○常陸帶神事	○鹿嶋	○鹿嶋神社	○鹿嶋七不思議	○鹿嶋年中行事	○高天原	○玉造
○板久	○麻生	○香取	○香取神社	○要石	○廣圓寺	○息栖社	
○江府日本橋	○釜ヶ谷	○大森	○本嵐	○野飼駒	○八幡宮	○白井	
○行徳	○釜ヶ原	○香取	○香取神社	○八幡	○八幡宮	○坂東左郎	
○目録							

昭和十六年一月十一日  
尼野貴英氏贈

本館蔵  
昭和十六年一月十一日  
尼野貴英氏贈





比叢とむくく  
 東に十里あり  
 けりしとん  
 西小居士  
 小舎原は



釜ヶ原  
 比叢とむくく  
 西士の夕日れ  
 谷ヶ原の  
 駒のくはく  
 比叢

本巻五ノ一

木曾路名所圖會卷之五

日本橋

行徳

吾妻の神社香取息極麻多形と猪せんといふ日本橋の御所と云ふ  
て行徳の宿人船よき人といふ小細町二十目の行徳河原より船を  
りて舟おんは川と河筋の枝川ありて名所小名本川といふは清  
度等河にあり左の支橋町といふ高の宿にけ町より五百羅漢の  
御寺ありて舟舟の名称も程とて中川の御園所より守屋殿  
をとりてゆき此人といふ水まき人といふとては漕舟川筋五葉  
船ありて中より老翁舟を備は賣業とすむ忽ち河の中流に舟を  
ゆけく向ふの岸を見れば舟の志をまきつりて若の浮葉と波小なれども  
舟をとりてゆき此人といふ水まき人といふとては漕舟川筋五葉  
大層深奥の中流に舟を備は賣業とすむ忽ち河の中流に舟を  
八幡やとて里まがひ行徳の宿舟をとりては合の舟とてゆき  
いひり小な舟とての形はひさしの小舟雨の道ありて道路は泥りて

本巻五、八

下情

足込寺の草鞋土の郷小御所に出るは月日の度き  
道のありて依拵人といふ野徑をゆくをて遠小都のありて  
頼まは白雲をふたつとては月日のありてはたて雲もあつて  
らん湖八幡といふは名所  
釜ヶ谷中二里八町は里の中より清水城跡にして八幡宮とせ  
る小所の生土神といふは道と東海道中と云ふといふは旅りの  
人少く道悪くして馬竹をもちたりては遠の林苑ありて村邑は  
てて竹とては憩息ありては名所といふは先づは名所といふは  
田原といふは名所の女とては名所といふは早苗といふは名所の  
楊子風といふは名所の女の毛といふは名所の田原といふは名所の  
戸といふは名所の卵の卵といふは名所の雪といふは名所の  
くもを中流とては名所の名所といふは名所の名所といふは  
名所の名所といふは名所の名所といふは名所の名所といふは

金ヶ谷

東のありの多しとみふあふは村南村のそと小田原城の  
 白井中を以て中野の邑に於ては田中村に在りし小見の小見と  
 田園地たるありて耕しつる玉苗をとりて是れを以て玉苗と  
 さぬのりくを以てあたらふがふ中野の田舎の煙火も多し  
 標榜の器より用事水龍をりしり幅敷と儀と夏の雨をさし  
 光との程より九種成りて三枚成りしは秋と冬は長はりしり  
 林園より種をく金ヶ谷を以て小田原に至りし野を以て野  
 原とて風成産する小田原の物も六十をりしは中野の物も  
 多し中野を以て遊ぶるに似たりこれに似る馬も人をも多し  
 公官の御馬も馬家の人あり小田原一駿馬は推してありと  
 親馬動も其子も多し中野は多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 そふ中野歩りは多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 より西の方と頼も多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ

五ノ二

白井

あぢ中見のりは成成多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 ましと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 白井の白井  
 大森まで二里は所を民居散りて城より中野とありし  
 二里を以て中野と云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 村のり中野あり

大森

本郷まで其所又野を以て民居散りて城より中野とありし  
 二里を以て中野と云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 村のり中野あり

本郷

本郷まで其所又野を以て民居散りて城より中野とありし  
 二里を以て中野と云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふも馬も多しと云ふ  
 村のり中野あり



本  
 嵐  
 舟  
 坂  
 舟  
 香  
 魚  
 麻  
 至

まき候の波と白くして五通小今一色ぞたぬと土佐日記の如しけふ  
のうらまじしうらまじ麻痺息極香取(湯)そ積るう流波山のつこ  
赴くう流波は船酔いひしき其字船を志門らふ船うらまじと  
をりて一登食きてえと橋凡とを船を志少船を志豆種く一  
夏のそれ暑も河風舟影く流波の青流く左右の岸船の若の成  
の下くそ風生志げ系真流の風ふらびくもつて夏流を志く一  
程も形く大河舟の志を志くく船工類ふれ河を志く名ありと同  
あれ船匠煙管を志く船がくく利根川とらふ深く蠶類川あ  
流波川とらふ合さく坂東を志くもり坂東の二流志るれを志  
る其首と志ふありし両岸を志くふ流く夕陽舟小傾若は棹の志  
浪ふと志るありし流おけきくも黒白を志く白洲もたて系流は  
を志くも真流地小流く平江洲くく流日流くく乾坤得  
志して船と一葉の如く飛んぐ神侍てふ所ありて

本名五ノ八

下  
神  
寄

神  
寄  
明  
神

神侍も私着られ下りてあ中の取食人共一夜を明く  
かたは起ちて宮前下宿と

祭神 惶根尊

末社 五前

神樂殿

御供所

神本あり

此神の杜取形く見まはすと森然くと大樹ありて無二層山のつ

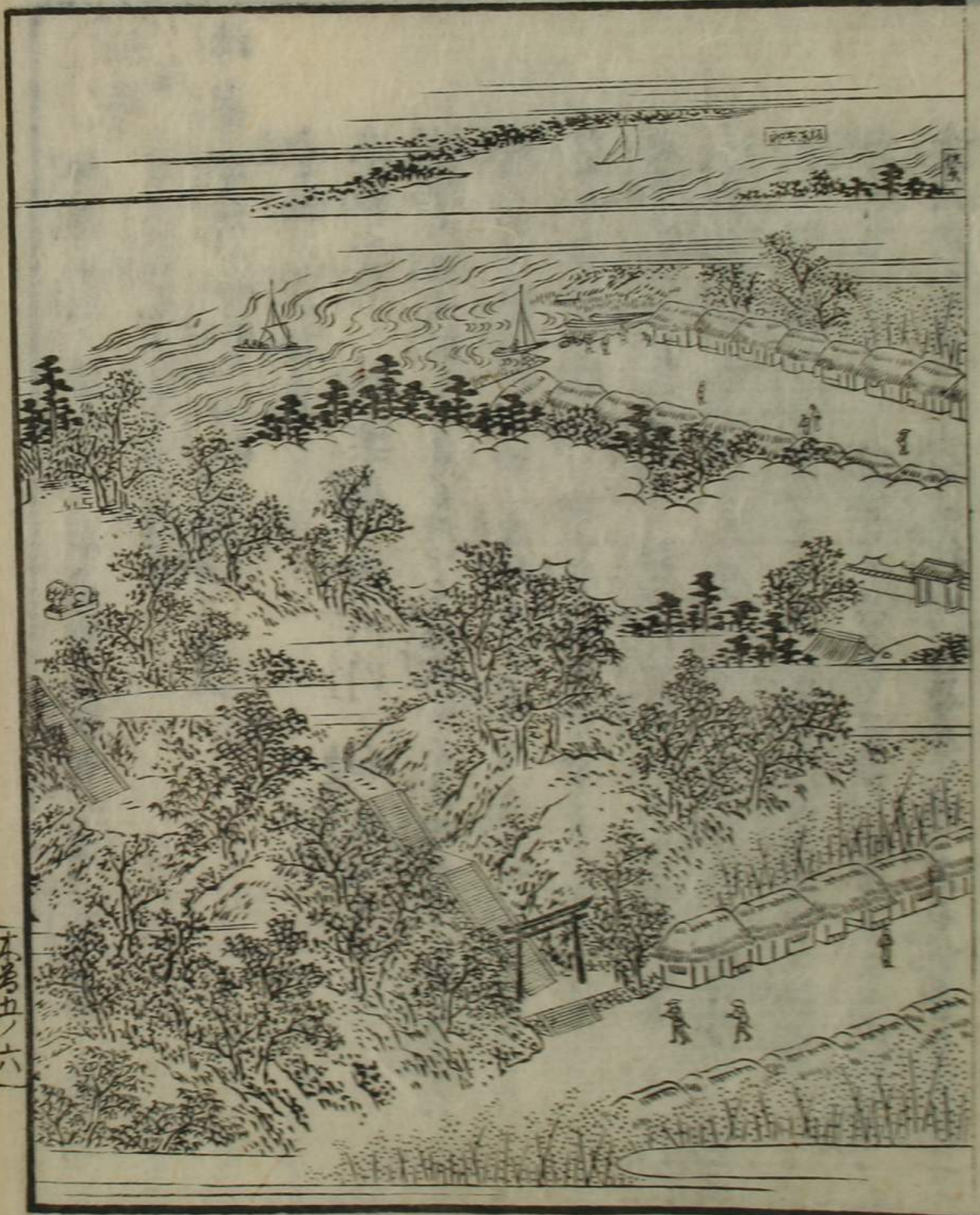
神さびる社頭たむ多し殊勝ありてのくを志くあわは若より又社

のわたり小川の橋度く都て七八町もあるる中々舟身くく所く小洲流  
流瀬ありて蒼流十段の流雁洲寄に下りて風来つたを故岡  
三子里長に十二風の舟ひ足流あふて屋を吊さるの江流より駐浪  
天を浸し潮水舟はまき備千頃の波際舟の流く潮流せりて  
流是のまき流きて浸ありてゆきとの船まのまふよりて交易舟  
業流るる流と又神の社(指)を志くはびくく志りむる流船工小



神寄社

汗来  
神地此  
四万の石屋  
頼む水  
えきし  
こぼの  
嵐ふり  
水徳



木五ノ六

ゆききくゆんぐは方ひ小白浪と目尻の雲は月波抱く為の  
方小波まう風清うしてあまを瓜家とたる漁舟を身をふりさ  
養とゆひ頭と共茶釜冠と一葉の舟舟よをを纏舟舟とて  
活の水清くは糸櫻花滑く滑く我豆を洗ふをくを瓶とく  
漁父あり竿竿下して輕船結のたぐひは釣ふ三公ゆを換りて  
く若魚の中とらう寸唐草小全鱗と獲る月舟舟とて歸る有る  
一約の縁の外利名將く三尺の遠回天地ゆく揚柳の月高うして孤  
蒼花の風軟くわけて雪花らるる易林と輕船釣く仲友を容るる  
恙の鱗を釣て曹公瓜蟹とむ波浪遠く出く巨鱗を釣るあを閑  
形の新まを漁笛をふりし鷗とまび下して波の浪小求る釣器と  
浪舟舟とられ舟波驚く凄涼とて古今の悲風をまははりて  
月小とらるる種と只梅よまがひくひるる梅雲のふれと浪  
洲の岸ふくく釣舟のさう小浪の面うくくして撒取乃る在是書回

本考五十七

舟のさうあまのほりわの波波帯々舟舟とて小虫の夢池とて  
ゆききくゆんぐは方ひ小白浪と目尻の雲は月波抱く為の  
方小波まう風清うしてあまを瓜家とたる漁舟を身をふりさ  
養とゆひ頭と共茶釜冠と一葉の舟舟よをを纏舟舟とて  
活の水清くは糸櫻花滑く滑く我豆を洗ふをくを瓶とく  
漁父あり竿竿下して輕船結のたぐひは釣ふ三公ゆを換りて  
く若魚の中とらう寸唐草小全鱗と獲る月舟舟とて歸る有る  
一約の縁の外利名將く三尺の遠回天地ゆく揚柳の月高うして孤  
蒼花の風軟くわけて雪花らるる易林と輕船釣く仲友を容るる  
恙の鱗を釣て曹公瓜蟹とむ波浪遠く出く巨鱗を釣るあを閑  
形の新まを漁笛をふりし鷗とまび下して波の浪小求る釣器と  
浪舟舟とられ舟波驚く凄涼とて古今の悲風をまははりて  
月小とらるる種と只梅よまがひくひるる梅雲のふれと浪  
洲の岸ふくく釣舟のさう小浪の面うくくして撒取乃る在是書回

香取

香取の浦舟着は地陸地十八所あり

香取浦

香取浦は地陸地十八所の儀

香取太神宮

香取郡小湊庄延喜式名神大

祭神 經津主命

神樂殿 日所

若宮

幸社の右

鹿島社

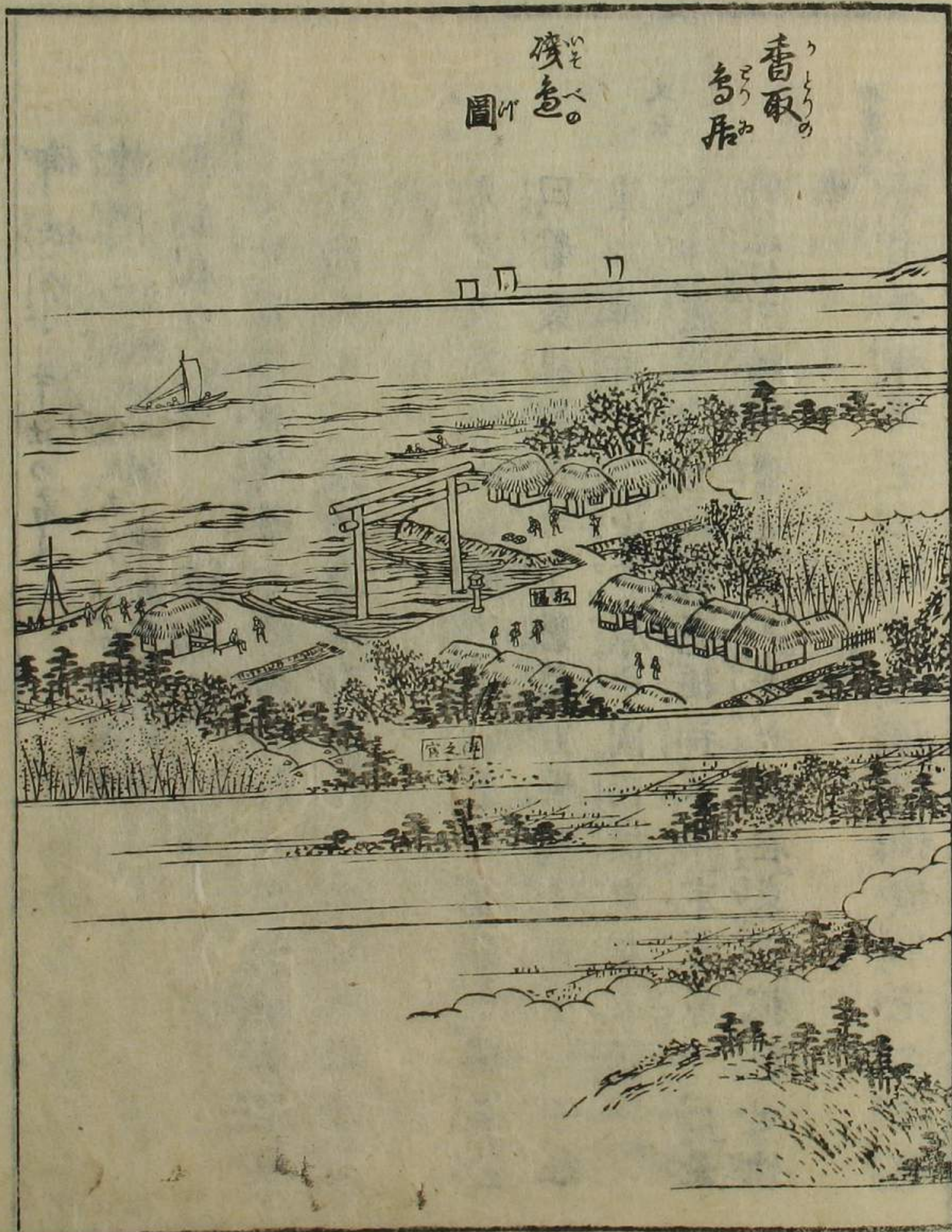
幸社の左

菟齋神

奥の方あり

宣康

香取の  
高取  
磯  
の  
図



本巻五ノ八

御供所 本社の右

樓門 豐樂殿の右あり

香取山寺 諸神塚 日上月

神代卷云

伊弉諾尊拔所帶十握劍斬遇突智劍又垂血是為天安河邊所在五百箇磐石也即此經津主神之祖矣

又云

高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者命曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神即令平定葦原中國而後皇孫天降云

又云

天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國是時齋主神彌齋之大人此神今在東國攝取之地也

神書抄云

齋主祭神之主也經津主神別稱攝取地名在東

天書云

海道下総國一作香取今為郡名故經津主号香取明神是春日第二神殿也

經津主神者天之鎮神也其先出自諾尊初諾尊斬遇突血成赤霧天下陰闇直達天漢化為三百六十五度七百八十三磐石是謂星度之精也氣

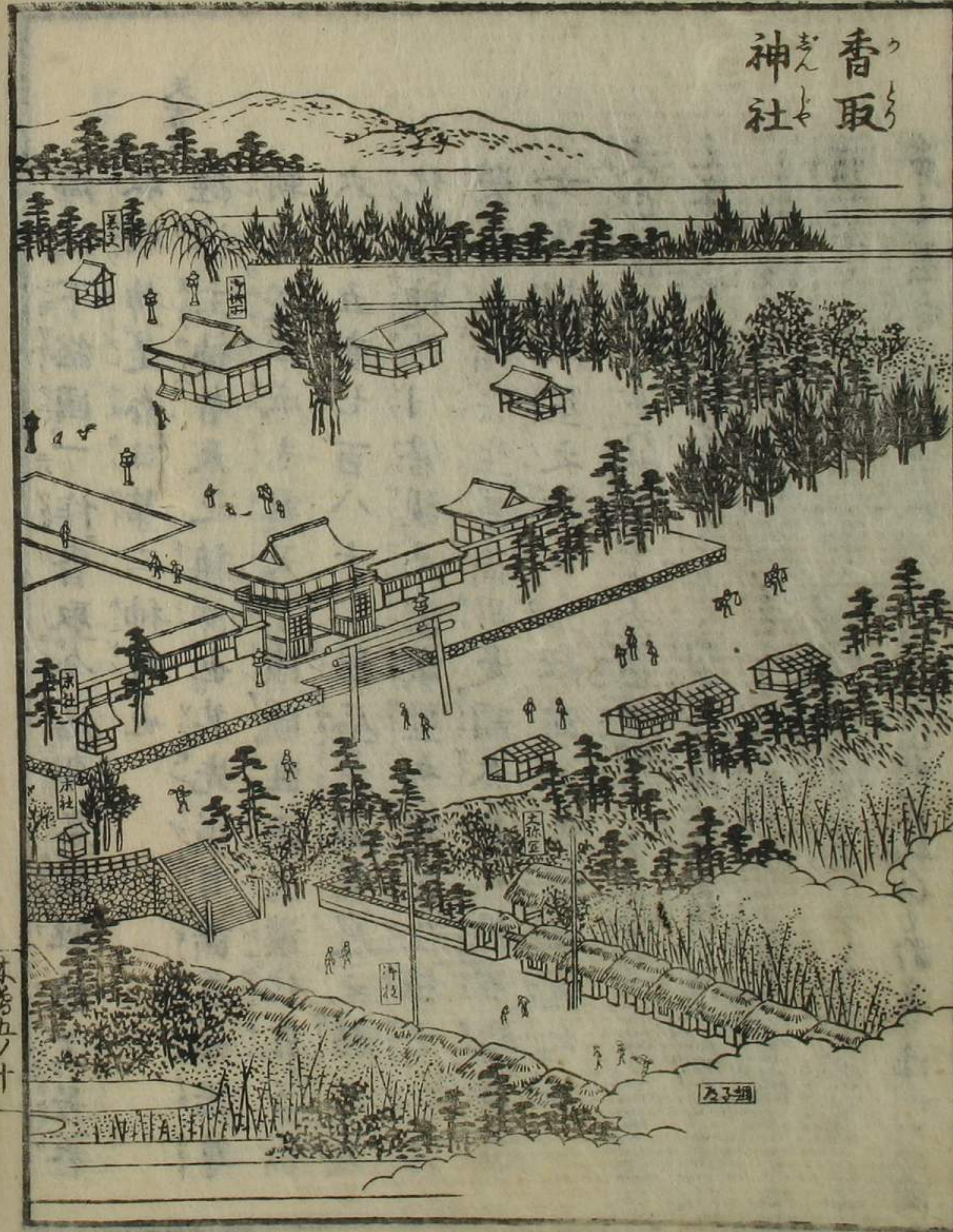
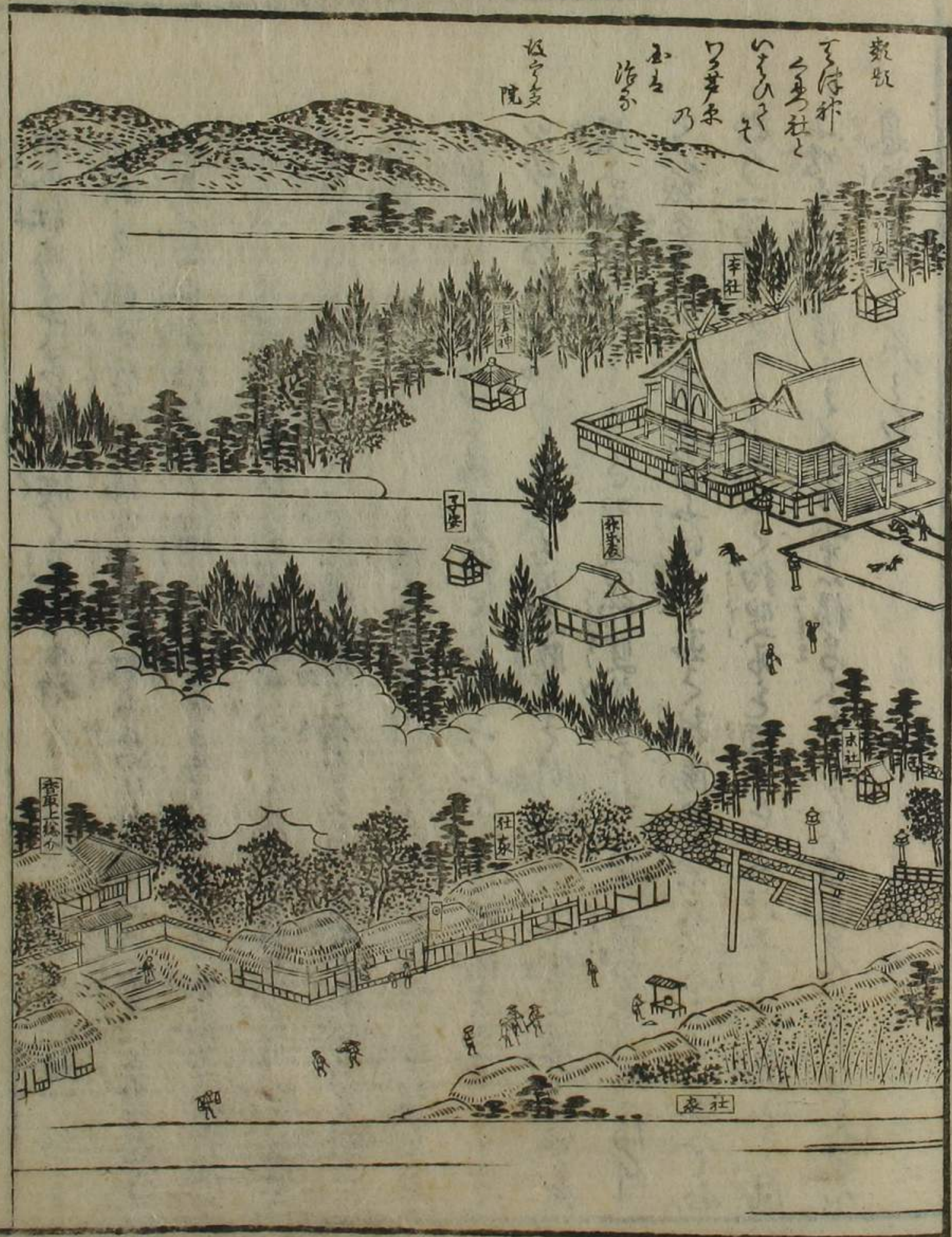
化為神号曰磐裂是謂歲星之精裂生根去是謂熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精男生磐筒

女是謂辰星之精女生經津主是謂鎮星之精

夫尚社の地も先の新島を以て社傳云神代より遷居ありて神武天皇元年法宮より遷居ありて之を例案に四月八月十月小歳を以て夏

いんぐら社於一千石大社宣紙香取上徳分少利安を緒方深ふと云社地廣くして少小法人多し門前の老人茶店軒を以て又少房云ふ

多し夏社の頂より芝居相撲ありては社の縁ひと相まじり南門の南園



のち社ありて古神不遠く文母も形

古神より津之宮の船場本座と又船本系とて萬頃の内天一葉のゆひ  
只見る清水雲根枝後一隈くくして幸あはれ遠小若岸と見えぬ  
面小舟して釣さるるあつ若呂尚の儀ありて文王を釣の洲あり餅をば  
其儀とむれ人様を食んで若小服とぬ小餅をとりて奥を取祿成す  
人をあはれん枝雅信とて山釣をりて川よほま小泉成海の中餅をり  
て國成物まを其中と釣る大釣とす侍つれば其美園の徳成成り  
ひひかの翁をばりて水と風と随ふりひひのふ雲と雲と雲と  
風小敷くちのてくすこの人の釣隻書をいへて獲の魚成る海川  
これ成るて一盞をりてけ小中と科陽の釣をあげりて萬事公  
形り一釣竿を賣りて酒をさる船工も共小磯と風  
小磯と漕り行ふるふかふかふかふかふかふかふかふかふか  
息柁の舟一舟とて

息柁

陸

け地をてや常陸國とて浦が島居のほりてを和坂下とて

息柁大明神

息柁大明神 息柁大明神

神祇

息柁大明神 息柁大明神

末社二社

日一社

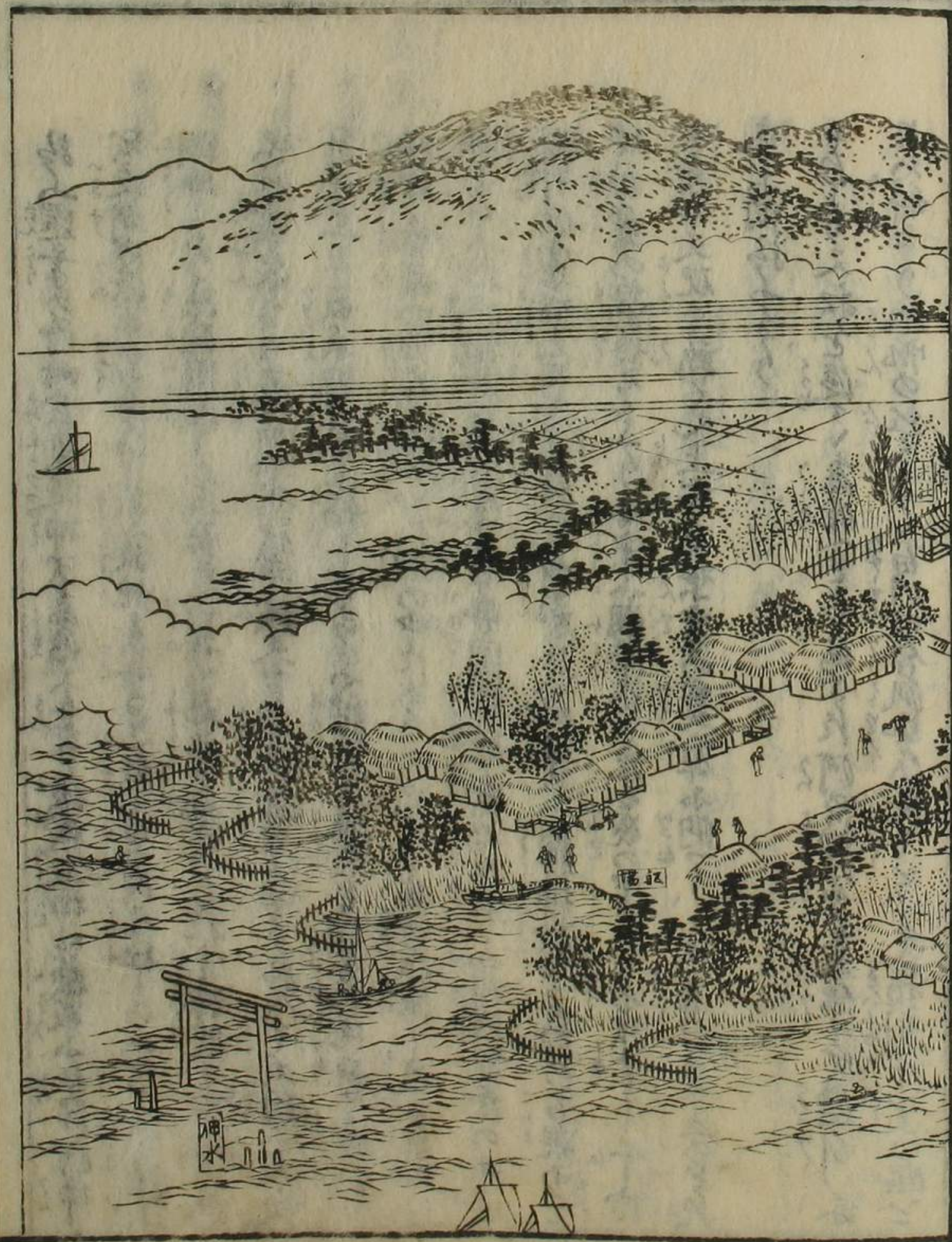
後田丸社

祇殿

八丈龍王社

幸地堂

當社とて皇十代神功皇后東夷征伐の時時南海本此水門舟泊を  
終へけ洲鶴松海波子漂泊く進得む也主カとほく勢もりしと進ふ武  
庫此海深あなる皇居時と終ふもよは神忽ち二箇男の神や  
祝と武甕槌命経津主命勢東征の將軍とて其副とて終ふ  
皇后とては促ひ神のてのゆく鶴舟忽ち走ると容易賊敵と征し



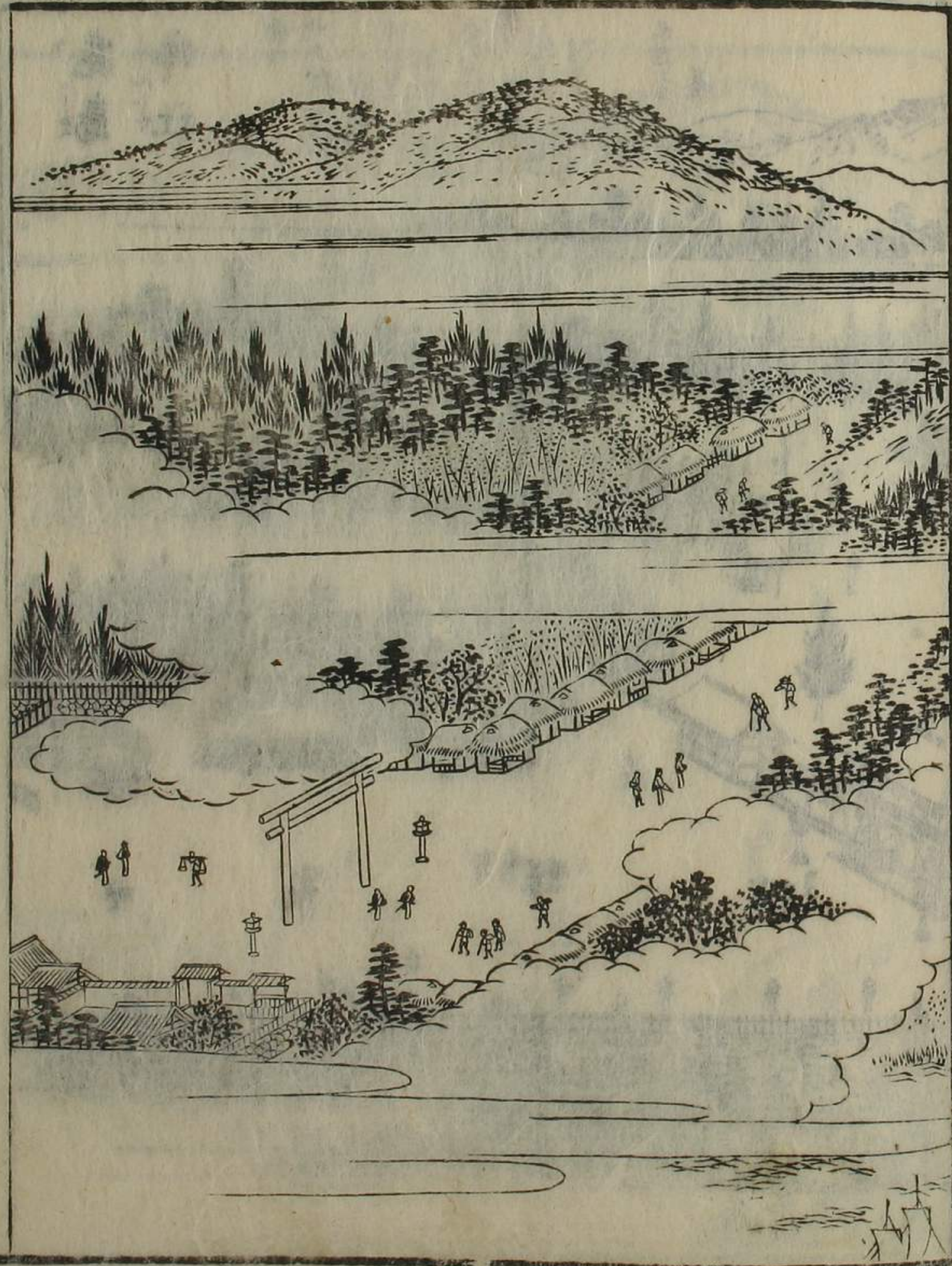
神還幸の時武甕槌神以座爲小宮と振威主神を楸取小宮とす神  
宮後洲の深井を以て宗教他々異なり故小東國二社といふ時八代元王  
湖中より陰龍陽龍と云ふ二龍石井を以て神として祀りて今福原より海に  
ふた霊泉あり厥后五十一代平城天皇明神と云ふ宗へ移りて又同二年  
月十二日高宗元曆小勅してまふ神祠を建てる又陰龍陽龍の霊泉  
海中も居の左右に海に潮の中にあつたといふも其味は淡く故小東國の  
舟より小舟神代武甕槌を以て伊勢國朝熊の阿蘇井と城國賀茂の神子  
流井は霊水と日本三所の名泉と又神宮小龍神社なる所の古視ある  
て枝葉の換れんとて海中小瀬湯と云ふ視の中はもと水は生と平井  
と云ふ又祝も乾く上右と禁裏の寶庫小納戸と云ふ社建てるの  
まふ納戸と云ふ

遠く兼葭風小おびと津原を以て暮蔭の暮を以て白浪天子は人を以て  
その指は海と幸名と箕幡といふも保五つ一上上野國利根川幸  
國中を以て大隈川系依川蠶糧川流波川等舎と土人利根川といふま  
に流四つあり下総國府川二五河内信太の妻那の同小牛冬之湖と云ふ  
又二小下総相馬より一川流是幸國新治より一一流舎は又四橋あり  
大洲の香取橋麻布あり香取麻布兩郡の界元慶半里あり是流  
流子といふ大洋の海にあり  
霞浦 行方郡小島一箕幡の中へ  
勅後採 霞のうもを以ててこれ事ある處に浦乃あはのいなり大  
勅後拾 白波の海を以て採天の原といふなりは採ふなり  
勅後古 春末よりあはれり海の煙を以て霧の浦と云ふなり  
勅後採 土庫の穴の浦を以て字を以て見たり人を以ては  
ゆく川のあると云ふなりと云ふなりは浦と云ふなり

明徳院  
土御門院  
後二位  
雅家  
定  
家







鹿島磯色一鳥の井



本巻五ノ十五









二月月次神幸七座 神代神代持

三月月次神幸七座

日廿日 一万牝神幸

四月朔日より十五日まで本社并末社神幸

五月赤月の晦日より満月五日まで神幸流落馬あり

六月月次神幸七座

日 晦日 名越枝

七月三日 平國の神幸始 神門出神幸ともい相出

日 七日 七種神幸土用干神寶以賜

日 十日 十一日 十二日 平國神幸

八月 新嘗會神幸

日 月次神幸七座

九月九日 重陽三神幸 相撲會あり

日 月次神幸七座

十月 亥日の神幸

十一月朔日より十五日まで本宮并末社神幸

日 月次神幸七座

十二月 初午三日神幸

日 廿七日 養老の神幸

日 月次神幸

下畧

廣圓寺 親雲上人の御記に云く今此經出

鹿嶋放城 六郎宗幹もこれと築きしなり





りて延方の町小若く船とあれり敷きつれぬ船よりトマを交度  
かぐて高島沢持を板久の道を通りおひは道仕遣形はゆき  
此人する是の湖井之入をひくして左のたを形舟は道林を越て  
武里津もゆけを板久の水つ小着くは地と赤魚いとめづりふし料  
かた十二の橋とらふありて西湖の六橋又陽長縣の橋と長サ南七  
式丈橋中高くして虹の形ふたつこれと申を比して風色の地あり  
宿居を河申造りゆ又筋打とてか小舟のりてまを漕ぐひま  
を輝さして川の向うの山とてなるとりてり豊後津とては流の山  
新うねといふこの都念の地とてふとては遊女もあつりゆの台神傍  
小舟あはれの川舟の舟船つたきけが

人志舟とて舟の舟とて舟の中なる舟とて舟の舟の舟とて  
あがれ舟舟とて舟とて舟の舟とて舟の舟とて舟の舟とて舟の舟とて  
せら舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて

本名出廿二

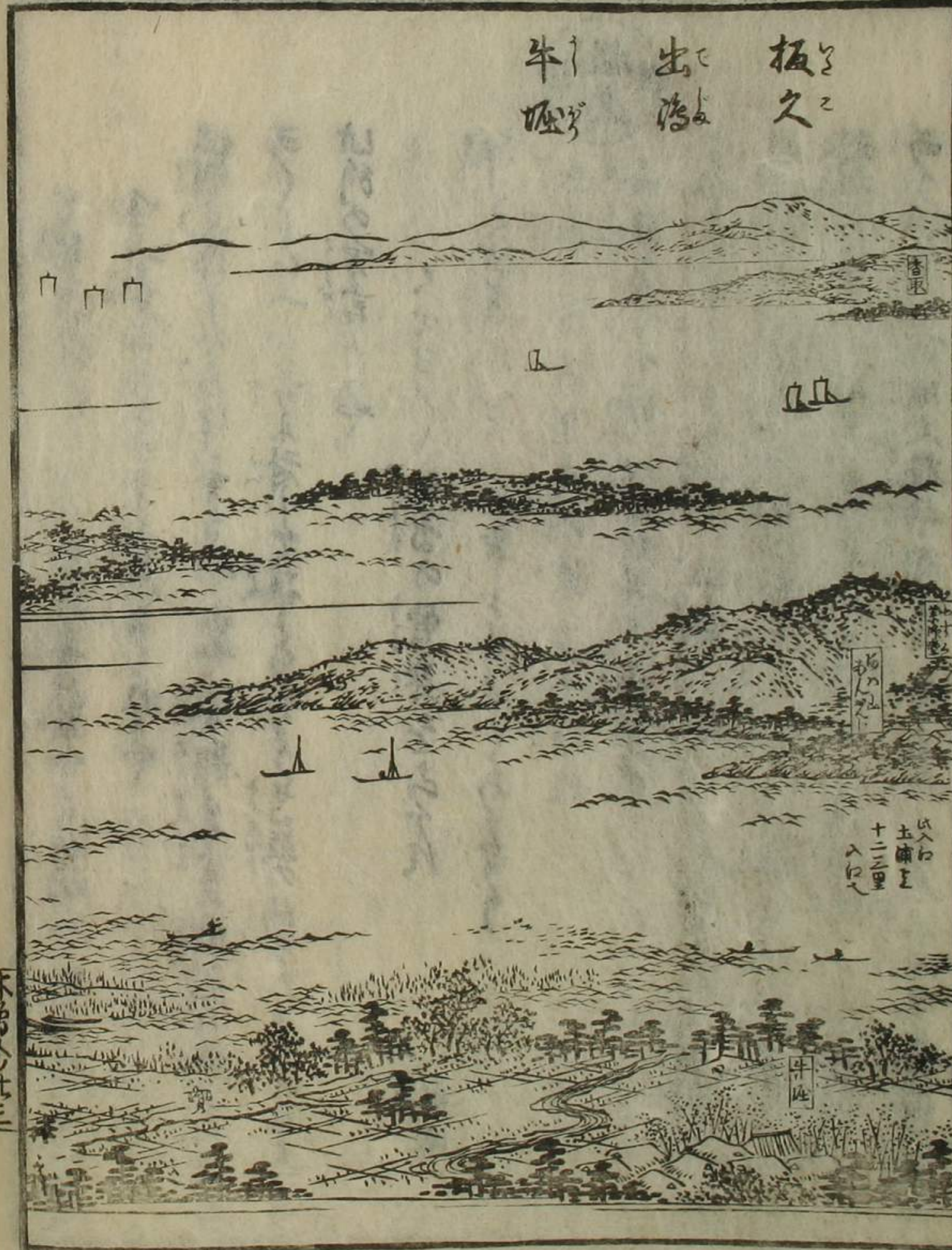
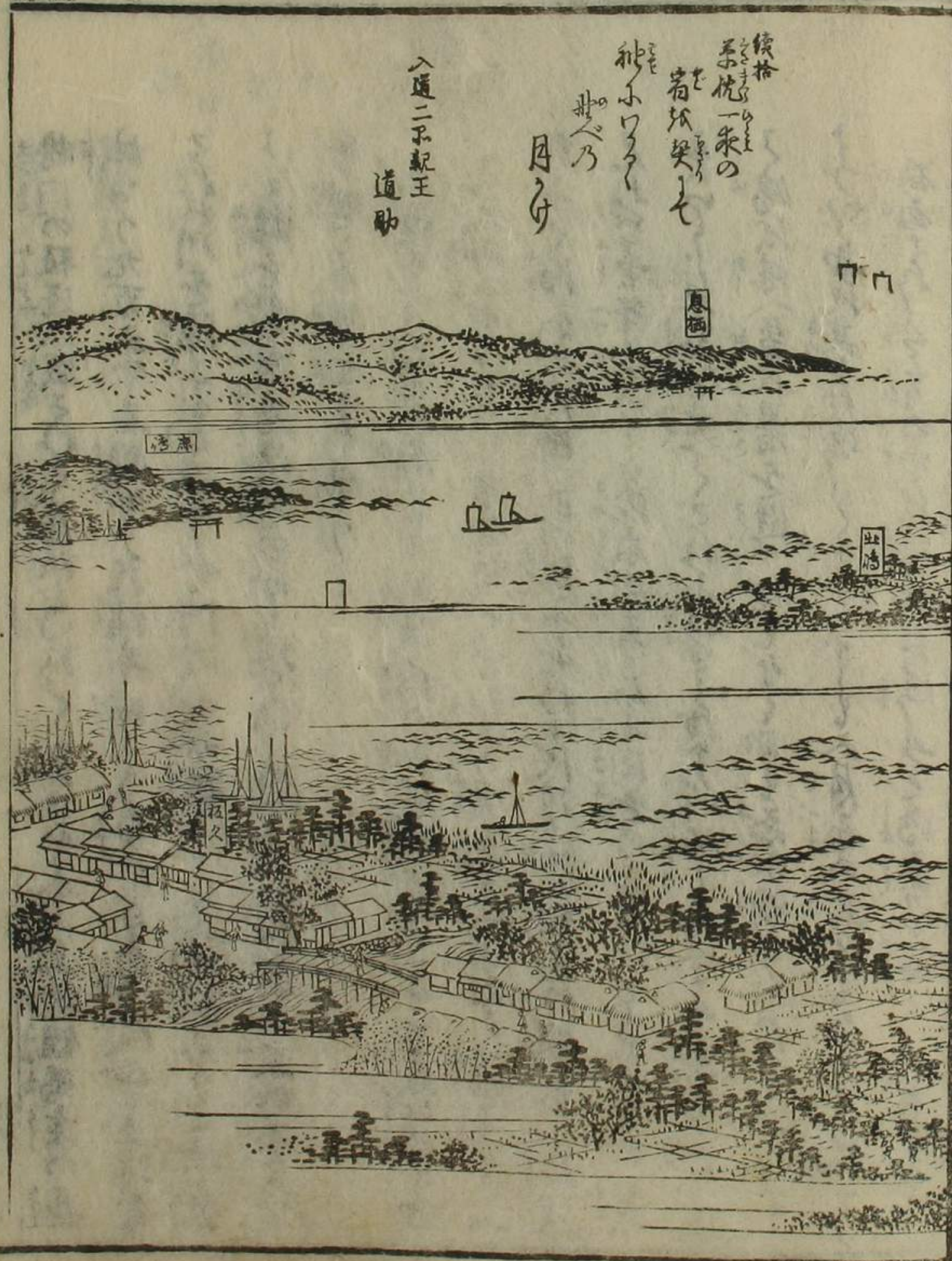
て起もせだねとて起もせだねとて起もせだねとて起もせだねとて  
舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
は瀬来ゆといふ舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
ヨくとりて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
け所の方言とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて

加五 祖風

都くは舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて

常  
板久  
陸

牛とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
小津とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
これより舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
けは所も又舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
都念の舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて  
ありて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて







碑あり守山麓士崎元明撰安永八巳年夏五月これを建てて  
新しき碑以て文を畧し日いつくを頼るに袖袂を志すて漸  
山下より

十三塚

筑波山上を里十三塚の里あり此山如く豊原もまうり  
これより山をくぐる道あり道中津原とて岩角崖窟あり謝靈  
運白山の峯に登る小本履を看す川原に石をせり時を不齒を  
下河と死と後齒塚をせり又蘭亭記云會稽の山陰葉亭子今  
此地崇山峻崖茂林脩竹あり又俛仰の間小陳迹あり古蹟らの山  
北せんや

筑波山中禪寺

筑波郡 齋の島のてく三郡小侍  
真盛 山頂小叢  
峰あり南沢陽峯とら北を陰峰とら陽陽お對して八國の  
相模 上信 陸奥 寺觀とある坂東豐後名嶽たりされを古今の序  
母を花瓜子やてたあらはれ所小浦といある昔月夜抄よりして志

本号五廿六

屋が尻屋をふたどまるる後く次みり多ひてしりしと後くありや  
志原しりしとまるる後く次みり多ひてしりしと後くありや

わけ多き君と称すひし後く身中を死すれしとありふあり  
ゆくとねのつ面よりけとあれと君を清氣小塚氣は

筑波郡の北にありてありてありてありてありてありてありてあり  
ゆくとねのつ面よりけとあれと君を清氣小塚氣は

筑波山と申すはけふしりれと昔れ入はらるるを  
庶民は筑波の山をけりてせりてありてありてありてありてあり

けりてありてありてありてありてありてありてありてありてあり  
けりてありてありてありてありてありてありてありてありてあり

筑波山の面よりけりてありてありてありてありてありてあり  
けりてありてありてありてありてありてありてありてありてあり

筑波山の面よりけりてありてありてありてありてありてあり  
けりてありてありてありてありてありてありてありてありてあり

男婦神社

筑波山頂陽峯小嶺あり  
延喜式筑波山神社二座一男神

大徳心 良諭

肥後

衆徒

糸神 伊弉諾尊

女辨事社 後輩小娘を祀

糸神 伊弉冉尊

日讀尊社 月讀尊社 素盞鳥尊 蛭児尊 須山山腹小

二神 乃幸原 道行乃 男輩乃 女輩乃

千手堂 山藏母

鸚鵡石 蘇の系に

安産石 同山徳盛大土

白雲滝 女懸の山腹母

美那濃川 男懸の山中に滝あり

後 櫻川 常とを志喜るふを梅川花乃流を立はりりも糸

新後拾 小泊水の花乃さるや美那濃河等之流を水乃さる流

後拾 流乃これ等乃様や美那川あり種々瀬とらるはりり人

新種古

英那農川等より流る紅きくをほりて波さきくや深らん

後撰

大御堂 籠波の山にあり

辛子千手観世音 祝の密より出現の

三重塔 大日女末末

岡山塔 同山徳盛大土を

薬作堂 後輩光佛に

志子堂 聖徳太子に

求聞持堂 大佛堂の

聖天寺 山の山腹に

約鏡堂 同所中

男辨鳥居 苗のさる

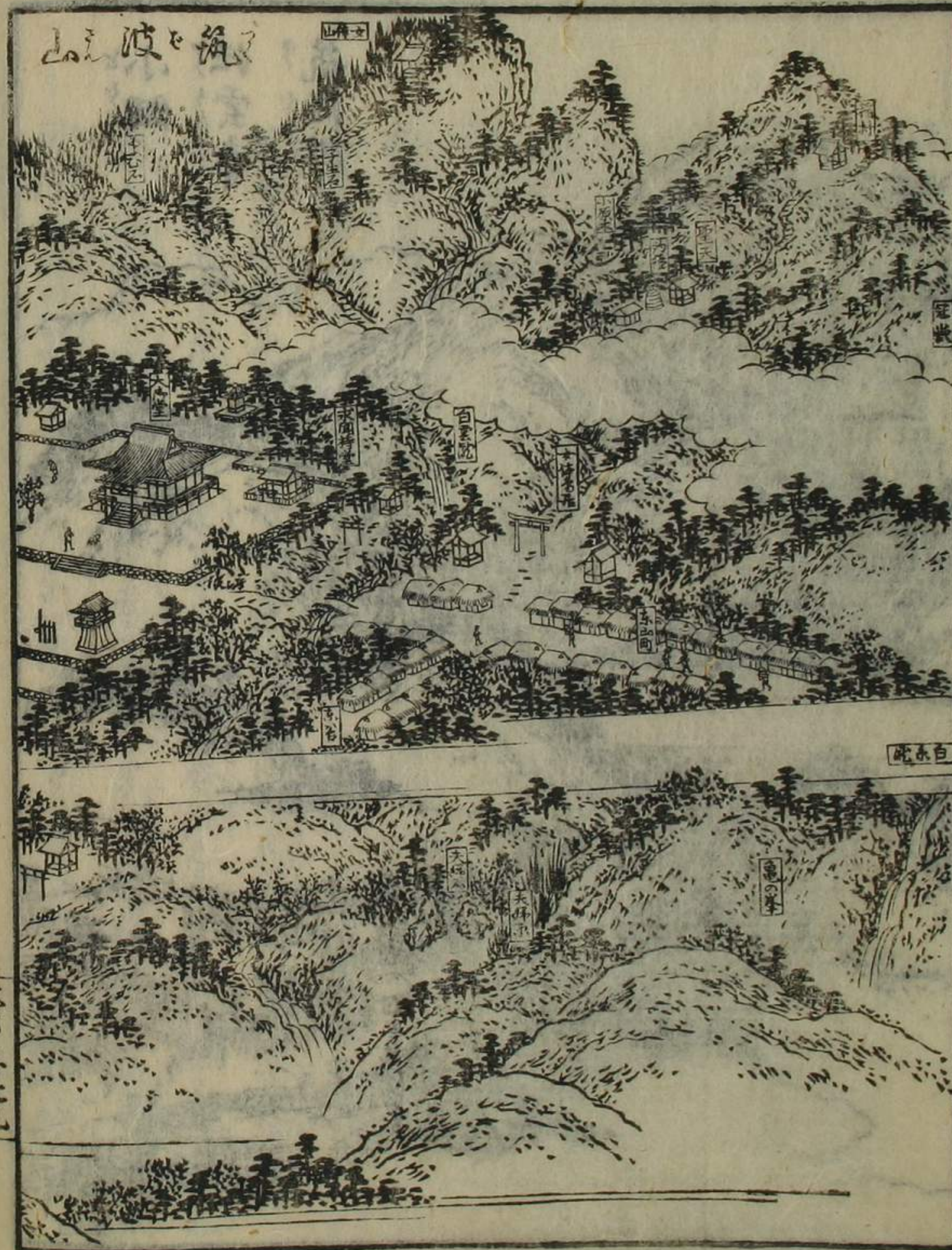
女辨島居女の島に

夫は山は京を名流波と書さしゆへ東海運流して波方の波  
板小流防を築くは後代遊ふこれ中へ山と築波中書ん波人波  
流波と名づく二神登山一山は水波を産得乃海小返けり  
夫は後代築波を築くは後人皇二十代桓武帝の時法相乃名流  
流大士は山より書さしこれ山と二柱乃流林と流林一其外  
御子山柱の流流波を千手子那の大照乃流流波  
世来の弁島天感中達一浪波下一山は神田三千所と流波  
神取佛國傍居に山を流波と書さし造るは流波大士自千手  
流波大士と書さし男伴女伴の中流波と書さし其流波弘仁年中弘法大師  
あふ山登山一山は流波と書さし其流波を流波と書さし  
真云秘卷乃流波と書さし其流波を流波と書さし  
男伴女伴流波と書さし其流波を流波と書さし

小畑  
法雲寺  
筑波碑



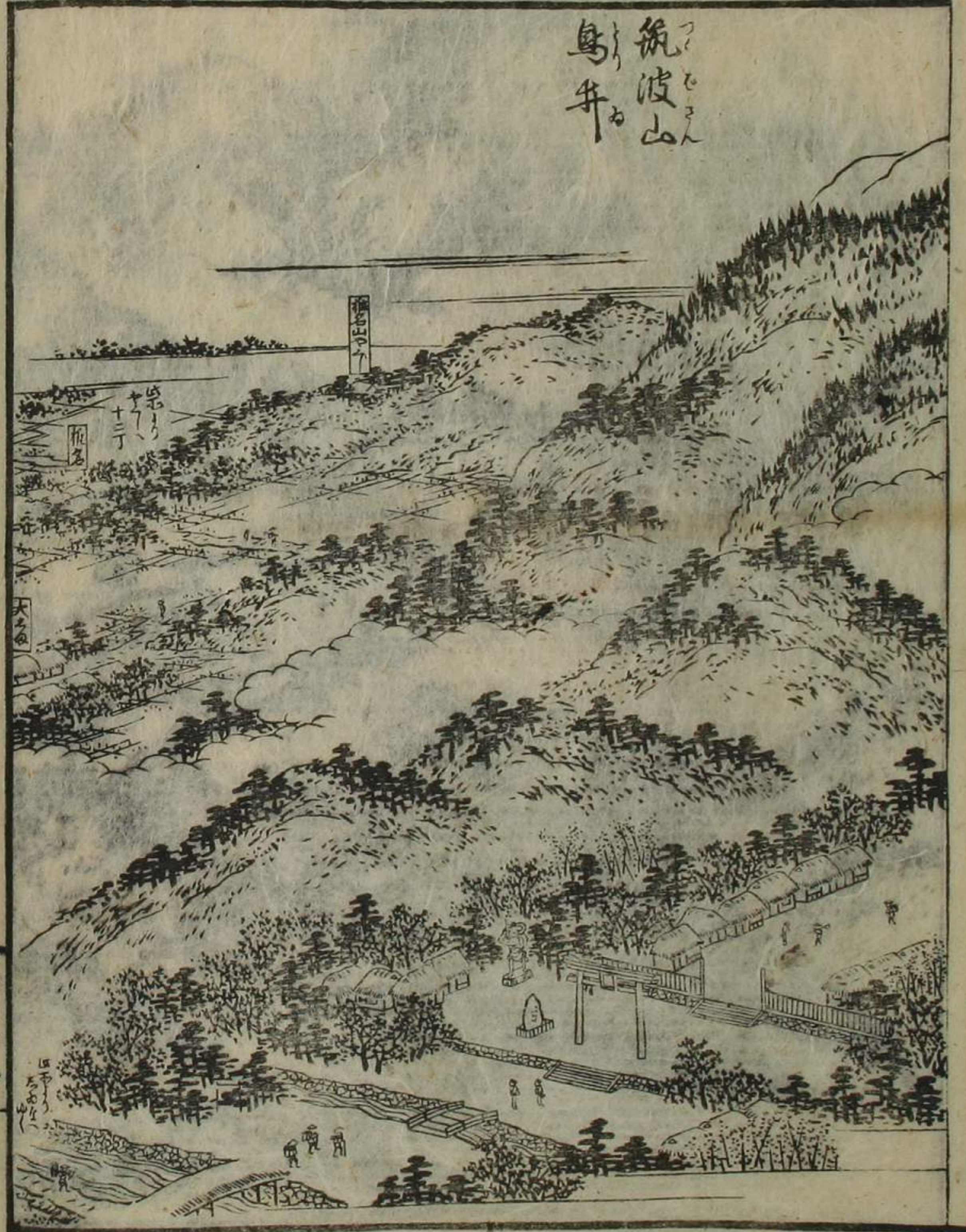
小畑



本巻九九九



統波山  
鳥井



本巻五十三

常陸  
推名

号はこれ南乃神乃雷泉すれはまき  
 和食源より及小比山女は境界小  
 東園官家の清輝依あり六月は勢  
 霊嶽まごお徳の道乃清神と仰ぐ  
 中と澤古の五基山の西南時開け  
 小井小是茶好本より乃中程より  
 号は高云京に寺は千七百名統波  
 房より赤毛京も寺一先と尚園乃  
 専ら形より

雪を中よりさだまけひては統波山  
 小乗中を四里半これよりゆくて  
 道より見ると小志たがひと好しく  
 長と野を成るる民居有

嵐雪



小野

筑前小野の内半ありていと難雑と少き跡あり  
宇都宮中へ武里半は街乃平地なれどいづれ泥所くふありて乃小  
道を知りは夏のはれせしむらほくとやんきのふふひひ  
今も思へば我身若う今にひひせむは我ら若うやう  
こ種より行なふ助けはれと種むらうもわくうつて宇都宮  
ありて

下野 宇都宮

あねら日光まで九里半下の半より西へり又日光まで廿里奥列  
白河まで廿里半十三河仙臺まで六十里  
は所乃殊まゝ戸田園後守彦少て七万七千八百石を領せしは色  
相云の地より一方の馬場ありて後所より勿論は戸より奥羽

宇都宮大明神

街道にて販食菓店賃倉家々一町中は乃方小宇都宮あり  
社殿奇麗なりて清人まゝは所の生土神とん

祭神 文己貴命 例祭九月九日

下野十社神 幸殿の左あり

神楽殿 あり 幸殿の右あり

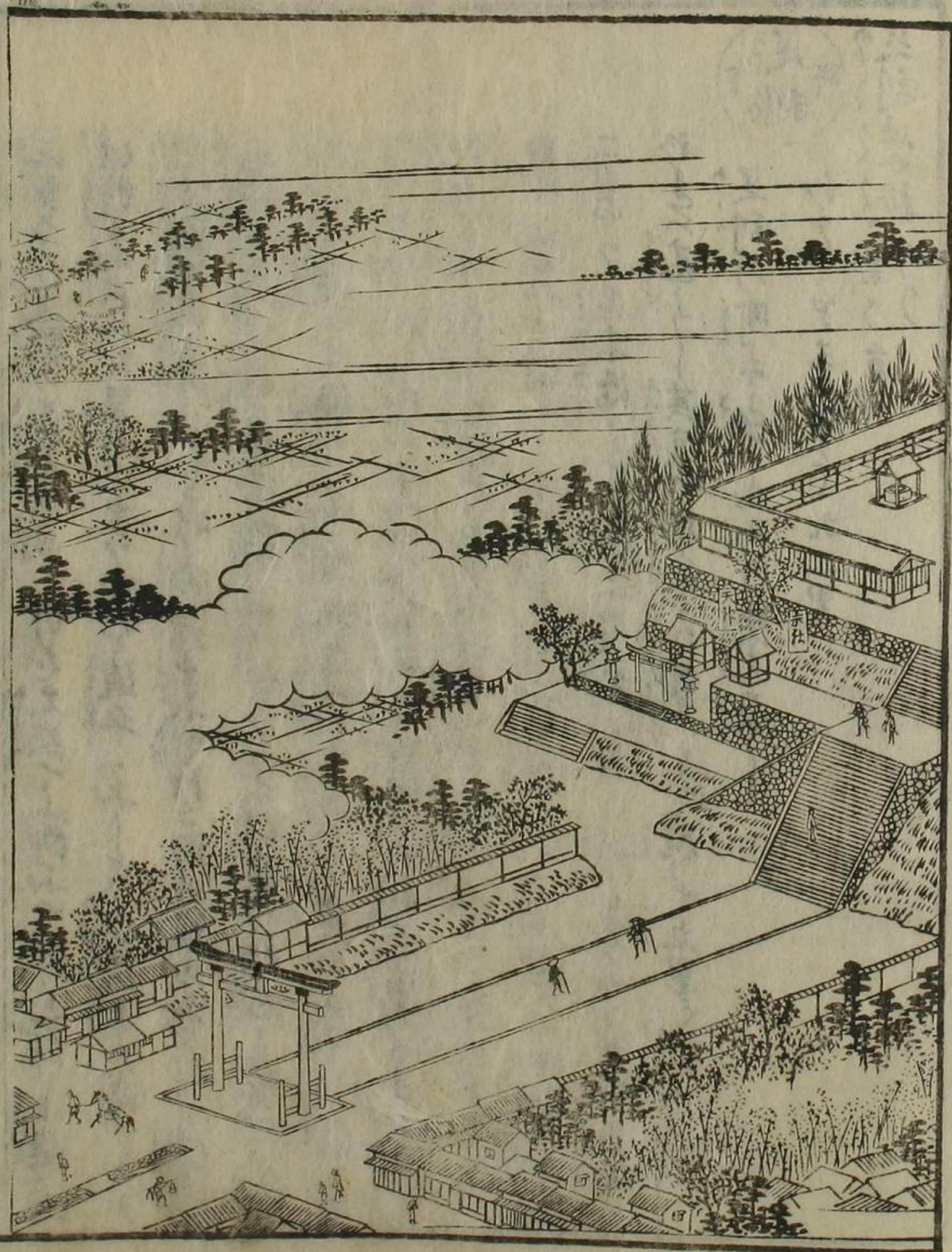
左右回廊 神馬舎 幸社の右あり

猿田妻社 あり 石階の左あり

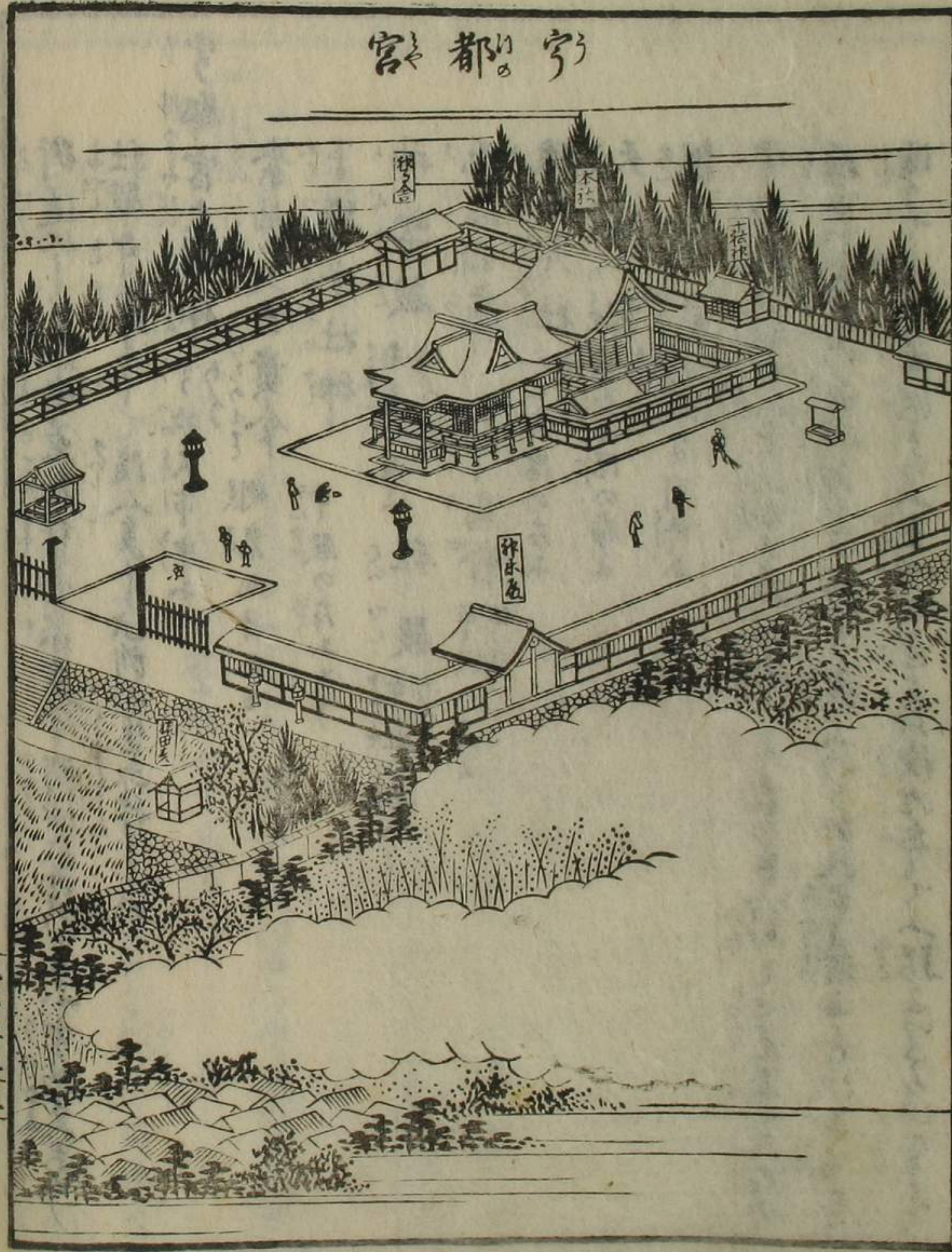
天神宮 あり 石階の右あり

観音堂 あり 幸社町あり

宇都宮の販食人を立出町乃半より右の方一町を日光道之左右の  
道より老松乃並樹成りて道を鷹のつらねを暑みそは本修を  
通して涼し世沢より左に成るるは徳治命て人形よりなるは



宮都宮



三里あり又扱の並本流るりて文沢下所より三ヶ所あり  
は所まで又武里ありやうを道平よりして右の並本流るり  
りまぬものありてこれより水舟小舟なる形り坂もなれど凡そ  
山深くぞへる今市て所へてねまあらはるる所舎とありて  
人言く浪つて駈りて半陣飯食人相たあともまゝ又市人の家も皆  
てりつての物を市にさるるへ入小生通とて別道あり是も日光  
街道より日光より江戸まで二十四里と云ふ文通りは二十六里と云ふ  
武里道はなれど道ありて川も多しは今市より日光の入口所乃所也  
二里ありて並本流るりて所へて小農家もあり道もなれりや日光橋  
形もなれりて其間宇治より日光まで都て九里と

足利乃所を山下あり東長

江戸よりまれば廿二里

足利野  
足利學校あり

門二重あり二乃門の間も橋の列樹を種より奥の門の内小孔子乃  
所廟あり其本は海棠榊柳梅松はるりてあり  
所廟南小向と面六間入四間あり其の形も板敷なり白木はるり  
ありて是より東階西階あり堂上本はるりて佛も古く聖像安置あり  
座像より長式尺寸許又聖像乃形も古く教曾思孟乃四配乃  
神主あり堂の内は是より蓋蓋蓋蓋のてり形も桑思あり著格著格  
あり神像の形小小房あり著格ありやう又神像の東は方あり小房  
有るは信札の形ありて其内小小野管乃神主あり作仁明天皇乃  
所廟小野管は學校を創て即ち所を其學問所ありて一とて小野初  
と足利乃所を其神主派を所なりて其後兼ありて上杉  
憲實再び學校を建て鎌倉の園覺寺より信札ありて其所也  
其所其所より信乃所同き者ありて其小所又其以四方  
通れりて足利の學校も度りて其憲實鎌倉の令沢所也

寺に學校と建く和隆の群書秘藏光儒書六黒印佛書五卷印  
と押金沢文庫乃四文字紙雙小書以又管原源成氏小至り大分金沢  
も類聚して書籍もみからむ小成文庫も名のとほまりそねり聖  
教つて近世は學校小ニ要和者とのつ傍りの足利の書を持て治東  
一宗寺小僧を二妻の願うす才辨ありて 將軍家も何候に世乃人  
こ種小學校と号に付 官家より植字一萬字と所寄附あり足  
利の學校小僧持てる傍の縁念建長寺此傍後り今も學校と稱と  
宗後傍傍終五六人ありをのり儒書武勅學校に付所廟小社領而石  
官家より所寄附は石堂と寛文年中に戸より所建立ありまこ  
聖廟乃東の方に列をわねく客舎あり申北正面小基階を安以又其  
西小 國初將軍此所位牌あり  
學校の東隣小虚空蔵寺あり大寺也堂古一西の方小島山あり菅氏  
乃城跡ありやう小足利の所を西にば大にあり濱ら願うるこ種足利の

上野  
大田

所とつ終あり下野上野の國界なりとせば川上足利より二里半奥小  
相生とつ所あり所とつ緒と多々織物たり相生と緒の名よりて所  
及び諸國に付地より出る  
足利より上野梁田へ半里八本も里を田まで一里半を田と  
本舞へも里三十町  
大田と新田義貞乃古城なりは所新田なりは少く城山有  
ありて金山とつ新田大炊小義をより義貞やて品徳をひく一不  
上野國乃何人新田小を即義貞とつ八幡を即義貞十七代の後  
亂降家嫡流の名を記し物とつも平氏世とつて四海のみ威小伏とる  
折つてされむ力あり國東の伴俊也はとつ金剛山のつありて  
つるまふいりある本居にんある所執事新田入る義貞城邊付  
て多しつるつありへり源平と家朝家にはとつ平氏世とつて  
とるを源氏とつてとつ源平とつて源平とつて源平とつて源平とつて

(大回)

不肖ありし人とも高潔れんむして信代弓恭の名残けさせ  
 御ふ今相控入乃の刃跡を見るも威亡遠くふあはれ奉幸國り  
 屬して義忠をあげ先給の宿願成中とあまふ人と存むるが勅命成  
 前々をまけしやうといふして大塔文の合旨成賜内とけまを懐と達  
 まさや回給ひたねを船回入道豊と大塔宮と山道の中中にも  
 て所産らるねを裁昌方役を先づしこましく合旨を申出せ  
 や幸をまげふ候きしてそのまが復助(そ)辱をらる其翌日船回  
 舟のれが義忠成二十餘人野伏のすくふ出でせくあ申ふくき  
 の事へ言ひ我身と成り勢のちひ成して船中をた秀がぐれお進  
 へし(す)耐をうり日士軍成ぞまたりなるうまう智の都乃神伏  
 どもあねをさく味方れ好成ぞと知力と合旨人あふ候成の事  
 よりとる合をせ迫つたうや成船回が勢の中れそのあく十一人  
 まだ生捕てらる船回け生捕ども成船ゆりてをそりふりけるを

本巻五廿六

今海軍成たりしありする幸全き得んあふあはれ船回成幸  
 へつりし御旗を上んし御ふ合旨あてけしあはれ海軍成  
 大塔文の所生前成身ひ向んああめ捕はる合旨と成業内ふ  
 しては方の徳をほましく官の所産あらまの道と申れお神伏成  
 ちたふ候ひく其時あましくあつと安うまき幸あはれ申一人  
 ちげし(の)い(の)成成たりし合旨を申出せしとて御里  
 十人を兵を重き人官の所方へし我あつる今やくと相持成  
 一日あつて合旨成御あてあましく御あてこれを身する合旨成  
 あつて論旨の文章に書れたり其詞ふりく  
 論言成あつて日記を成萬國を理し防を明君乃徳成り礼と活  
 之四海を治むる武臣の節也順奉の同高時法降と教朝憲成  
 ねひが強ありて徳ありて威を振し務成のあり天珠成ふあり  
 愛小果奉の宸襟成をまめんが為小將一筆の義忠を起んて



日光道  
今市駅

林  
松の林  
高乃野

永代明

敵感む海、忠賞何ぞ淡うん早く関東征伐の謀をわづりて  
天下静謐の功成致さる者綸旨も仍執達也  
元弘三年二月十日  
左少辨

新田小左郎友

綸旨の文章家の眉目小徳川に在り編まわれ義貞斜るに  
其相首より虚偽して多し幸國ぞりこれなる  
山の西の方小義重の寺あり大光院と云ふ寺は三百六十石あり  
其も宮を建ててはけり此村は義貞の一族の家之に在るなり  
山と云ふ田山の麓にあり服屋と云ふ田乃西本橋のありあり縁堀の田  
の東も小徳川にあり世良田にあり由良大徳と云ふ田と本橋此田あり世良田と  
道のなり小徳川あり大徳と云ふ世良田乃車あり江田の三村あり  
中江田と道の側あり由良も道のなりなり大井田は江田にあり  
高乃野のみかこれ義貞の一族の家之に在り

本巻五卅七







東谷依勢より天明谷より流布其谷谷中ほどく其谷の勢  
大依勢を天明谷も梅原より天明より鍛冶を式印所鍛冶を  
川原まで三里半川原を式列忠まで三里鍛冶の清城天和子  
七月涉除あれども又室永元年再び築たれり

野  
宗田

天明より左の方へ天明より足利へ三里半あり足利より右の  
勢より右の道と梁田八本城通る天明より足利へ所をわたり  
志田へ物九を里程遠く天明より三里程と足利のくへり  
上列沼田へゆく道あり天明より沼田まで約十二里あり沼田を  
利根川乃より右のこれむく志田安房守信列上田より  
新より今と城あり日光山乃より右の吾津より新より足利  
よりと新田より沼田へ沼田あり川を流すその勢也

本号五十四

足利より新田八番天明がせと極く奥原氏の  
遺稿成るく小出れあり

二子山

後撰 二子山とも小越のやまなるをそねるひ成るく今と寺 漢人寺屋

安撫川

新子 石と名安撫のあらふりなるは以橋ふりり泊ら舞 蓮生法師

木曾路名所圖會卷之五

本會經本所開會...

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side]*

本為五甲二

